

---

# マイライフ＝マイフェイト

クランツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイライフ＝マイファイト

### 【Zコード】

Z5408D

### 【作者名】

クランツ

### 【あらすじ】

魔法使いの家系に生まれた皐月龍介。両親が殺され今まで一人で生きてきた龍介。しかしある日、異世界に召喚されてしまった！？そこは剣や魔法が一般化された世界。元の世界に帰る方法も無くこの世界を旅することにした。これはコメディです、コメディ…………のはずです！…………多分（え

## プロローグ

### 魔法

数十年前、この世界の先住民達が編み出した產物。

魔法を私生活や狩りなど、先住民達はためらいなく使つていく。

しかし、魔法の力はしだいに強大になつて行く。

世界の混乱と崩壊を恐れた“神”は一部の家系のみしか魔法を使えぬようにした。

そして現代。

神に許された魔法使いの家系で一人の子供が生まれた。

数百年間その家系は才能が無かつたのか魔力が感じられず、代々受け継がれてきた魔法は風化するはずだった。

しかし生まれてきた子供からは魔力が発せられていた。

両親と祖父は「これで一族は安泰だ」などと言つ、

その子供にあらゆる魔法を叩き込んだ。

その力は常人にも感じられる程強力で人々から異端の目で見られ、ある種の信仰者や教団から追われる破目になった。

そして時が過ぎ。

両親と祖父は殺された。

俺は自らの魔力を封印しようやく平穏を取り戻せた。

高校にも入り毎日を平和に過ごした。

一人暮らしは最初は辛かったが、もう慣れてしまっていた。

友達もできだし毎日を楽しく過ごしてきた。

16になり部活は剣道部に入っている。

ていうか無理矢理入れさせられた。

だがバイトがあるため部活に行ってる余裕は無く幽霊部員となつている。

そんな7月の暑い日

まさかその平穏が唐突に崩れ去ろうとは、知るよしも無かつた。

## プロローグ（後書き）

初めまして！　マイライフ＝マイファイトを書くことになりました  
クランツです。

龍介「皐月龍介だ、よろしく  
何でここに居んの？」

龍介「さあ？  
まいいか

龍介「いいのか」

さて何故この小説を始めたかと言つとですね、

龍介「そんなもの語りうつとするな  
ひ、ひどい……

## 第1話 運命の日

ペペペペペペ、ペペペペペペ、ペペペペ

「…………朝か」

時刻は6時。

一人暮らしなので毎朝弁当を作りあまつたオカズを朝食にしている。  
「ハンバーや学食といつ手もあるが金が掛かる。

「んつ…………」

軽く背伸びしてキッチンへ向かう。

キーンローンカーンローン

「おはよう」  
「おはよう」  
「おはよう」

クラスメイトと挨拶を交わす。

席に座ると一人が歩み寄ってきた。

「おい皐月、昨日のテストどうだった？」

「ううせえ聞くな、クラスメイトB」

「B！？ Aは誰だ？ いやてか扱いひどつー！」

こんな話をする毎日。

だが飽きる事も無くこれはこれで気に入っている。

授業時間は過ぎて昼飯時。

弁当を手に持ちいつも屋上へと向かう。

教室で食べてもいいのだがここで食べるのが好きなのだ。

「遅かつたじゃないか龍介<sup>りゅうすけ</sup>、今日のオカズは何だ？」

「腹減つた」

目の前には一人。

一人は女性でこの学校の教師、剣道部の顧問をしている。

名前は柳沢<sup>やなぎざわ</sup>涼子<sup>りょうこ</sup>。

黒髪の長髪で今時珍しいポニーテール、結構綺麗なのだが本人はカワイイ系だと思っているらしい。

「もつ一人はさつきのクラスメイトB、以上。

「やつぱり扱いひどくない?」

「気のせいだ」

「ま、俺は柳ちやんと食べれるな!向でもハラッ!」

涼子の拳がバカの腹に入る。

「私は教師だぞ、ちやんは止める」

「毎度毎度、俺の弁当狙つなよ」

「別にいいじゃないか、減るもんじゃないし」

「いや減るから

結局今日も分け合えることになつた。

あのバカは側で倒れている。

そんなに効いたのだろうか?

「やついえば龍介、たまには剣道部に顔出せよ!」

「バイトあるから無理だ」

「顧問としてはそんな奴はやつたと退部させたいのだがな

「ならいいわればいい

「めんべくせー

「こつせー

「皐月、まだバイトしてんの？」

いつの間にかバカが起き上がりっていた。

「まあな

「俺も始めようかな？」

「聞くなよ

「どんなバイトだ？ 我が生徒B」

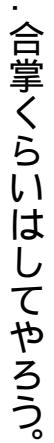
「柳ちゃんまだ…………もう少しここですよー。」

おお、何か泣きながら認めた。

「どんなつてなあ…………ヒロイと「死ね」ギャアアアアアアア

アア

「

やつぱバカだな…………

そして放課後、剣道部へは行かずバイト先へ向かう。  
居酒屋で主に接客をしているのだがたまにつまみなども作つたりしている。

16からは普通無理だつたのだが、一人暮らしで親も居ないとわからず快くOKしてくれた。

うん、世の中いい人はいるもんだな。

バイトを終えて家に帰る。

家に着くと夕飯を作り、しばらくしてから筋力トレーニングを一通りこなす。

追われる身となってからは毎日身体を鍛えているのだ。  
それから風呂に入る、心地よい疲労感が来たところで眠る

これが俺の今の一日だ。悪くは無い、むしろいつまでも続いて欲しいとさえ思う。

そして今日もいつものように田舎を閉じる.....

『ヤアアアアアア  
.....』

この日、親父さんが急病のためバイトは無く久しづりに部活に出ていた。

部員は十人程だったが皆相当強い。

しかし龍介は剣道ではこの中でNO - 2だ。

一番は部長なのだが結構良い勝負をする。

部活にこないこと周囲からは妬まれる事もしばしば。

「よし止め！ 各自防具の手入れをして帰るよつて、では解散！」

『ありがと「ジゼ」こました』

「おい龍介えー、お前全然来ないのに何でそんなつええんだよー。」

更衣室に移動し部員の一人が龍介の首根っこを取つている。

「痛いですって！ 先輩」

「おいおい、それくらいこじとくやれよー」

「「ジ」教えるよ「ジ」を」

「「ジですか…………無心になん…………ですかね」

「基本だらうが！」

「や、結構雑念入つてましたよ」

「むう～…………」

周りに居た数人が笑つていた。

「よー。」

校門のところでバカがいた。

「俺を待つてたのか？ クラスマイトB

「もうそれはいいよ…………俺は柳ちゃんを待つて「あいつなら  
今日は宿直らしくな」マジで！？」

「ああ～あ、ついでねえ～な～」

そう言ひ歩き出す一人。

「ツー？」

しばらく歩いていると突然頭の中で何かが過ぎる。

『たす……て……くだ……』

女の声が聞こえたような気がした。

「どうした？」

「いや何でも……！」

足元を見ると薄く光を放つ魔法陣が描かれていく。

まずい！？ これは！

「おい！俺から離れろ！早く！」

「は？ いきなり何？」

「チツ！ 恨むなよ！」

龍介は強引に蹴り飛ばす。

近くの塀に背中からぶつかり悶え苦しむ。

「カハツ！？ お前……ゲホツ……何……しゃが……！？」

その瞬間、龍介の足元を中心に強い光が辺りを照らす。

やがて光は消えるも、そこには龍介の姿は無かつた。

この日を境に俺の人生は一変した。

いやもしかしたら魔法使いに生まれてきた時点で、運命は決まっていたのかもしれない。

## 第1話 運命の日（後書き）

クラスメイトBの名前出でませんでしたね～

龍介「ていうか名前あるのか？」

さあ？ 無いんじゃない？

龍介「ひどいな……それは」

## 第2話 可笑しな姫と龍介と……

城内地下「召喚の間」

「姫さま、準備が整いました」

ローブを着た男が女性に話しかける。

「そうですか、では始めてください」

「はつ」

数名の人間が中央にある床に描かれた魔方陣を囲む。

『サモンスキル召喚魔法……』

一人が魔法発動のため言葉を発する。

しばらくして魔方陣が光りだす。

その光はしだいに強くなり一面を照らす。

あまりの眩しさにそこに居た全員が眼を瞑る。

そして弱くなつていき光が消え、眼を開けると……

そこには一人の人間が魔方陣の中央にいた。

黒髪で少しラフな髪型、顔は整っている。

背は180といつたところだろう。

服装は白い半袖のカッターシャツで黒いズボン（よつは学校指定の服）を着た男だった。

「おお！？ 成功です！」

しかしその男は出てきた途端その場に倒れてしまった。

「！？ タイヘン、彼を医務室へ！」

女性が異変に気づいて声を上げる。

「は、はい！」

周りで何かが聞こえる

眼を開けようとするとがなかなか開かない。

「…………ツ」

何とか眼を開けたものの視界が歪み、その場でバランスを崩す。

だれ…………だ……

思考を動かそうとしたが意識が遠くなつていいく。

途中女性の声が聞こえた気がした

「う…………ん…………？」

眼を開けるとわざとは違う場所にいる。  
上半身だけ起き上がり辺りを確認する。

「どうだ？ ハハ」

そこは何とも豪華な造りの部屋だった。  
家具一式は揃つてあり、龍介はふかふかのベッドにいた。

「起きたか」

後ろから声がする。  
振り返り見ると、

金髪の長髪で瞳の色は蒼く、綺麗な顔立ちをし、  
胸から腰の辺りまでの鎧を着ており、剣を腰に差した女性がいた。

広い廊下を歩く一人。

さて…………やつのは召喚転移魔方陣だな。

サモンゲート

あいつがないといふことは巻き込まれてはいけないか……  
もしいたとしても斬り捨てるけどな。  
こいつもさつきから無口だし、いきなり「ついてこい」だもんなあ  
」。

ああ、何かもういろいろムカついてきた。

などと考えて、二つの間に大きな扉の前にいた。

そして一緒にいた女騎士が扉を開ける。

扉の先には広い部屋があった。

名付けるとするなら、そのまんま玉座の間だろ？。

立派な椅子に座っている女性。

見た目は15、6歳くらい。

小顔で髪は少し青っぽく、ショートヘアの綺麗な髪。  
カワイイ感じの薄紫色のドレスを着ている。

そして客人を迎える花道状に並んだ人達が眼に映る。  
その中を通り奥にいる女性の前で止まる。

「姫、連れてまいりました」

そつと軽く足をつき跪く。

「ありがとうございます、ウイーリア

「勿体無きお言葉」

ウイーリアと呼ばれた女騎士はそのまま頭を下げる。

「で、俺にどうしたの？」

龍介は姫様に向かって話しだす。

「それはまた後で話します、とりあえず今は聞きたい事がありますか？」

「……」

これから何をするか雰囲気でわかったのか無言で龍介と“一人”を除いて全員が指差す。

その一人が口を開く。

「はい？ 私が君を召喚したクライ「そんなことはどうでもいい」グアッ！？」

近づいて“とりあえず”一発殴る龍介。

「なつ……何をする「いやあ」まさか召喚されるとはなあ、さすがに思わなかつたよ アハハハハハ」グガッ！」

爽やかに笑いながらも殴る龍介。

「キッ貴様！ こんな事して唯で済むと「いいから避け」ひつ！？」

数分後

見事にタコ殴りにあつた男は何処かに運ばれていつた。

「氣は済みましたか？」

# 姫様が口を開く。

「ああ」

「そうですか、では本題に入らせてもらいいます」

『私の助けになつてください』

は？

「イヤです」

笑顔で返す龍介。

「何故ですか？」

「何故つてあなた……」

「こきなりそんな事言われて〇〇するやつはこません」

「わうなんですか？」

「どんな世間知らずだよ……  
てかもう枠超えますよ。」

「他当たつてください」

「困りました、とつあえず話を聞いてください」

「…………わかりました」

姫様が辺りを見渡す。

「……では話しつくいですね………… ウィーリア、私の部屋へ彼を  
案内してくださこ」

「よろしくのですか?」

「ええ、お願ひ」

「はっ、かしこまつました」

案内された場所、それは綺麗な部屋だった。  
最初見た部屋より豪華だったがどこか寂しい感じがした。

しばらくして姫様がやってきた。

姫様とウイーリア、龍介の三人は中央にあるソファに腰掛ける。

「で、話とは何でしょかお姫様」

「はい、この国は豊かなのですが小国です。今まででは友好関係に守られていたので他の国から襲われませんでした」

「.....」

「しかし、最近では度々襲われるようになり、どうしたらよいのかと困っていると城の者が召喚を薦めてくれました。  
古い文献を読ませていると昔そつやつて免れたという国が見つかってたので、助けてもらおうと召喚したということです」

「この国の王と王妃、姫の両親は姫が幼少の頃、病でお亡くなりになりました」

「こんどは姫様ではなくウイーリアが語りだした。

「.....」

龍介は黙っていた。

話は数分続いた。

「姫は一人で何でもこなして今も立派に「もつといい…………」何?」

龍介は奥歯を噛み締める。

今言った一言が気に入らない。

「そうですか、なるほどよくわかりました。この話

」

嫌々で聞いていた表情が一変して真剣な顔へ変わる。

「断らせてもらひ」

## 第2話 可笑しな姫と龍介と……（後書き）

姫様のところへ変ですね……………スンマセン。

龍介「何故に謝る」

わかつてて投稿してたからです……………

龍介「じゃあ書き直せよ」

いや、もうこのまま行こうかと思つて。

龍介「なら謝るなよ」

いいつけ

### 第3話 説教は程々に

「断らせてもらひ」

その言葉が一人の耳に入つてくる。

「どうして？」

姫様はわからないといった表情で聞いくる。

「人に頼る前に自分で行動しろ、とにかく俺は何もしない」

龍介は立ち上がる。

「ですから、自分でやつても無理でしたからあなたに「それは違つ  
な」……『どうして』とです？」

「さつきの話を聞いてわかつた、自分でやつて無理でした？ 違  
う、お前は“何もしていないんだ”」

「！？ そんなことありません！」

小さいときから一人で全部がんばつて『思い込みもいい加減にしや  
がれ！？！？』ツ！？」

怒鳴り声が部屋中に響きわたる。

「一人だと？ お前にはそこにある奴もこの城の人達が見えないのかよ…………お前にとつてこいつらは唯のお飾りか？ それとも何でも言つことを聞く人形か？」

龍介はウイーリアに眼を向けて話す。

「拳句の果てには一人で全部がんばつてだと？ お前、じときに何が出来る。」

ただその場で迷い勝手に困り果てているだけだろうが「

その言葉にウイーリアが立ち上がり剣を抜いて龍介の眼前に刃を突きつける。

低い声でそう呟く。  
「貴様…………これ以上の姫への侮辱は私とて許さんぞ」

「俺にはこんな奴につくお前等の気持ちがわからねえよ。  
それにさつき、何故両親が死んだとかいう話をした？ 同情を聞くためか？」

「それは…………」

ウイーリアは言葉を詰まらせる。

「残念だつたな姫様だけが特別じゃない、俺にも親がいないんだよ」

龍介は途端に寂しそうな顔になる。

「子供の頃、目の前で殺された……」

病とかではなく“俺のせいで殺されたんだよ”」

「…？」

「死ぬ間際にさ、何て言つたと思つ? ハハッ笑つちまつよ

『アンタなんて生まれてこなればよかつた

「…………」

一人には言葉が出てこなかつた。

「それから俺は本当に一人で生きてきた。周りには誰もいない、毎日逃げて逃げて逃げまくつてあの言葉を重荷にしてきた」

「あなたは…………」

「周りに人がいて、慕ってくれる人がいて、尽くしてくれてる人が

いて…………

姫の言葉を無視して話し続ける龍介。

「それでも…………一人で生きてきたみたいなこと言う奴が、一番嫌いなんだよ…………」

その言葉で完全に沈黙する一人。

「お前はさ…………俺みたいに一人じゃないだろ、周りに人がいるだろ…………そういうこと言つなよ…………」

「あ…………つ」

姫の目から涙がこぼれ始める。

「姫…………？」

その場でうずくまる姫。

「私つ…………今まで一人だつて…………思つて…………父様と母様とうさまが死んでしまつて…………私一人で生きていくとばかりつ…………うあああああ…………」

それから姫は子供のように泣きじゃくった。

「気が済んだか？」

「ええ、見苦しい所を見せてしまいました」

「いや、泣きたい時に泣くのが一番だ」

「そうなんですか？」

「そうなんですか？」

「わかりました今度からそうしますね」

「ああ、でもあんまり泣きすぎると迷惑だぞ」

「ふふ、そうですね」

アハハと笑う一人。

重荷が取れたのか、姫は少し明るくなっている。

それを見ていたウイーリアの顔は微笑んでいた。

「あら？ そういえば、まだあなたの名前を聞いていませんでした」

しばらく話し合つて突然姫が思い出したかのように話す。

「ああ…………そ、うだな、俺の名前は臥月 龍介だ」

「臥月…………龍介…………龍介様ですね、覚えました」

「臥月？ 何故？」

「私は第十三代王女 アイシス・ステイラークです、アイシスとお呼びください。そしてこちらが」

「ウイーリア・アーラントだ、何と呼んでもかまわん」

「アイシスに……ウイーリアね、わかつた」

そして少し遅れた自己紹介を終えた。

「あらもうこんな時間」

アイシスが窓を見てそう呟く。  
ここには時計という物がない。

しかし外の景色でわかるため然程問題にはならないみたいだ。

べつううううう

そんな大きな音が鳴った場所はと、何と姫様だつた。途端に顔が紅くなり後ろを向くアイシス。

「そ、そろそろ食事が出来ますわね。い、いきましょ！」

その言葉に一人は笑っていた。

食事を終え、もう遅いからとウイーリアに地下にある、コンクリート剥き出しの素敵な素敵な部屋へ案内されました。

そこには硬いベッドと小さな机だけがありました。

「貴様が何と言おつと姫を侮辱したのは事実だ。よつて今日一日はそこで寝る」

そう言つて元来た道を戻つていくウイーリア。

それでもウイーリア足を止めず角へと消えていった。

女性の声がした。

よく見ると田の前の牢屋にも人がいた。

紅い髪のセミロングで綺麗な顔をしている。

黒のミニスカートに大きく胸の開いた赤いTシャツ、  
その上に薄地のロングコートと変な組み合わせだったが、動きやす  
そうだった。

「何だ、人いたのか」

「何よ、いちや悪い?」

「いや、何で捕まつたのかな~、と」

「そ、それは…………その…………ねえ?」

いや、聞かれても。

「最近ピンチだったからさあ、城なら何かいいモノあるかな~  
……つて

あまり関わらないでおこづ。

「ちよー? 何よそのかわいそつな人を見る眼はー!」

「いや、べつに~……」

眼を背ける龍介。

「まあ、いいわ。とにかく静かにしてね、今大事なところなんだから」

「脱走の計画でも練つてゐるのか?」

「そうよー。だから邪魔しないでね!」

「はいはい」

そう言って何かブツブツと呟き始める女性。

さてと……………これからどうするかな。

Q ピッカリで元の世界に帰る?

A 無理だな、自分で移動したのならともかく召喚で無理矢理だからな。

しかも異世界ときたらなおさらだ。

Q ならこれからどう行動する?

A 考えてはいるが……………実行はまだだな。

しまりへ待つか

そしてベッドに横になる龍介。

時間が過ぎ深夜

…………… そろそろいいだろ。

### 第3話 説教は程々（後書き）

強引にまとめちゃいました。

龍介「わかつて書くお前は馬鹿  
うわー、キッパリ言うねコイツ。

龍介「アホ、マヌケ、カス」

言いすぎだボケw

## 第4話 旅立ちの深夜

龍介はベッドから起き上がる。

あいつらまだ起きてるかな？…………あれ？

「ん？ 何だ、まだ考えてんのか？」

目の前には未だにブシブシ滋つて頭を抱えてる女性。

「あんた気楽ねえ。 同じ捕まってる身でしょ、あんたも考えな  
れこと」

「悪いが俺はこれから出で行くところだ。 卅、がんばれ」

「はあ？ どうして出るのよ。 こじは対魔法防御があるから魔  
法使つても意味無い】ベキン……【…………つて」

そこには格子の隙間から南京錠に手を伸ばし意図も簡単にぶつ壊し  
てる龍介がいた。

「……………あんた以外に力あるわねえ」

「結構錆びてたし、捻じ込みながら引っ張ると簡単に折れたぞ？」

「いや、普通無理だから」

そのまま何事も無かつたかのように普通に出でてくる龍介。

「ちゅうじこにわ、私も開けてみようだい」  
「こや」

.....

「もう二つのは、もうちょっと備えて置いておこなさこよ」

「商業用得だひ」

「じゃあ、出してくれたらお金あげる」

「お前、金無いから」「こるんだらうが」「

「いひ」  
.....

「もひとも。」

「んじや 条件」

「なになこ？」

「これから先、俺と行動する事」

「何でそんな」と

「はつー？ まさかあんた、私の身体が担当でなん」「じゃ、さよなら」「冗談よ冗談！ わかつたわよ、一緒に行つてあげるからー。」

「よし成立だな」

【バキン！】

そしてまたも樂々と破壊する龍介。

「で？ 何でまた一緒に行動しろなんて言つたの？」

「いやあ、召喚されたばかりで道もなにも知らないからな」

「召喚？ へえ、あんた召喚されし者サモンナーカスだつたんだ」

「サモンナーカス？」

「ええ、召喚によつて出てきた者をそう呼んでるわ。たまに召喚して強力な人や獣を呼ぶ国があるんだけど……あんた力は強いけど魔力は全然感じないわね」

魔力……か。

とたんに寂しそうな顔をする龍介。

「どしたの？」

「いや、何でもない。…………俺は皐月 龍介だ、よろしく

「私はシェリー・レインカースよ」

そして握手を交わす二人。

「よしじゃあ、さつあと上に行べや」

「それもわいわい。や、早く」の城から出ましよ

その言葉を聞いて龍介は少し考へる。

「こせ、ちみつと通り道して行く

「えいえい？」

当然聞いてくるシーリー。

「お姫様のと」

「ウフフ…………ウイーリア…………もつと楽にしなきこ…………

「…………」

「ひ、姫…………！」…………それ以上は…………ああー！」

アイシスの部屋で服を着たままベッドの上で、アイシスが上ウイー

リアが下といつ構図になつてゐる。

「ダメよ。一人の時は名前で呼びなさい…………」

「あ……くつ！ ア、アイシス……様……ああん！？」

「フフフ……」

「あー…………も、ハ、だ、めで、す、ん、あー、?」

「うわー、あの二人で」ういう関係なんだ」

「アイシスが“攻め”か……逆だと思ったけどな」

いつの間にか部屋に入つてきていた二人。

二人がいるとわかつた途端、顔を真つ赤にするウイーリア。アイシスは平気な顔をしている。

「あ、どうぞ気にせず続けて続けて」

そう言い近くに置いてあつた剣を取る。

「その」となんだが、アイシスには悪いが俺は「これから出て行く

「やつですか、わかりました。お気をつけて」

.....

やけに簡単だな。

「やつが上めるかと思つたんだがな」

「ええ、多分やつはいたへんと思つてましたから

なるほど。

「ああ、それと成り行きで」こいつ連れて行くことになつたから

そう言つてSHOマーを指差す。

「じつも～」

「ん? お前は誰だ?」

知らんのかよ.....。

「いや、知らないならいいよ

「?」

そして城門前へと移動した四人。

「じゃ、短い間だつたけど元氣でな、アイシス」

「はい、こちらの都合で召喚してしまつてすみませんでした」

「それはもうこいつて

「…………わかりました、ではお元氣で」

「…………じゃあな」

そのまま外へ進む一人。

「おこー。」

「ん？ おわ！？」

ウイーリアが紐で縛られた布の袋を投げつけてきた。  
それを慌てて受け取る龍介。

「餞別だ！ 持つていけ！」

中を開けると金貨や銀貨など結構な量があつた。  
おそらくこの世界の金だろ？。

「うわー、それすごい金額よ」

それにしてもいいのか？ こんなのもうつて。

…………… ま、 いいか。 くれるつてんだし。

「 ありがとなー！ ウィーリア、 いいとこあるんだなー」

またまた顔が赤くなるウィーリア

「 な………… へ、 うぬわーー、 もう もと行けーー！」

その言葉にアイシスが陰で笑っていたことは内緒にしておこう。

龍介達はアイシス達に手を振り城を後にした。

「 つじえ！ 何で野宿なのよ ーーーー！」

「 だつて、 宿無いし」

二人は道の外れにある木の下で叫んでいました。 (主にシェリーが)



## 第4話 旅立ちの深夜（後書き）

いやあ、風邪で寝込んでしまつていて小説書けませんでした、ア  
ハハハハ。

龍介「大丈夫なのか？ 無理するなよ」  
お、心配してくれるんだ。うれしいな

龍介「悪化したら、その分俺の出番減るじゃないか」  
そっちの心配かよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5408d/>

---

マイライフ＝マイフェイト

2010年10月15日22時46分発行